

季報

二松學舎大学附属図書館 Quarterly Report

- P2 レポートの効能 森野 崇
- P3 レポートが上手になるために必要なこと 飯田 幸裕
- P4 図書館からのお知らせ
- P5 ラーニング・コモンズのここがいいね！
- P6 本学所蔵資料紹介
- P7 本学教職員関連著書紹介 / 新着図書 おススメの1冊
- P8 本学教職員著書紹介

No.102

2018(平成30)年7月

レポートの效能

文学部国文学科 教授 森野 崇

レポートの作成という課題に取り組む機会が増えたのは、やはり大学生になってからだったと思う。高校時代にも、夏休みの宿題などでレポートを書くことはあったが、大学入学後は求められる質も量もアップし、「またレポートか……」とうんざりすることもしばしばだった。

とはいえ、レポートのテーマとして示されたために、その世界に近づいたりふれたりできたという経験も少なからずあるから、「レポート」と聞いて嫌な思い出ばかりが湧き上がるわけでもない。私は教育学部の国語国文学科を卒業しているが、入学した頃は興味のある分野・作家・作品と興味のない分野・作家・作品との差が激しく、例えば能や狂言、歌舞伎といった伝統芸能には全く関心がなかった（今でも積極的に観劇するなどの習慣はないけれど）。「劇文学」や「文学史」の講義で、能と狂言を能楽堂で観て、それに基づいてレポートを書くとか、国立劇場で歌舞伎を観たうえで、レポートにまとめるといった課題が出されなければ、もしかしたらこれらを一度も観ない人生を送っていたかもしれない。だが、実際に劇場で観てみると、能も狂言も歌舞伎も、演者の台詞や動き、衣装、音楽等すべての要素が絡み合っ作られる空間に魅せられ、大いに楽しめた。いわば食わず嫌いだっ私が劇場に向かう機会を作ってくれたのが、レポートだったわけである。

一方、以前から慣れ親しんでいたものがレポートのテーマに指定され、課題として取り組む過程でそのおもしろさを再認識するという経験もした。私はサッカーが好きで、中学生だった1970年代半ばから、サッカー中継の少なかった当時としては貴重な、『三菱ダイヤモンドサッカー』という番組（その頃、海外のリーグ戦や強豪国の代表戦が観られるのは、この番組ぐらいだった）を毎週チェックしていたし、たまにスタジアムに出かけてもいた。そのため、テレビ観戦中心ではあるが、大学生の頃には結構な観戦歴になっていた。ある時、履修していた体育の講

義で、私の大学と他大とのサッカーの定期戦を観てレポートせよという課題が出た。一緒に受講していた友人は面倒くさがっていたが、私は専門誌の記者になった気分嬉々として取り組み、苦勞せずに数枚のレポートを書き上げた。戦術的な駆け引きなどを細かく検討していく中で、サッカーの魅力をまた新たに感じる事ができたのだった。

こう振り返ってみると、レポート作成は、調べる力・分析する力・書く力・まとめる力等々のスキルをアップさせる効果だけでなく、レポートにまとめる機会がなければ覗くことすらなかった世界に多少なりとも足を踏み入れたり、知っていると思っていた世界の広さや深さを改めて感じたりという体験をもたらす、非常に大きな効力を持っていることに気づく。中学や高校でしばしば課題として出される、美術館や博物館の〇〇展を鑑賞してまとめるレポートなどでも、それによってこれまで興味のなかった分野のおもしろさを知る場合がある。さまざまな資料を読み込んで書くレポートも同様で、作成のプロセスで、自分の知らなかったものの見方や分析の仕方に気づく経験ができれば、たとえレポートの完成度は低くても、実りがあったといえるのではないだろうか。

もっとも、自分の知らないことを知らないままにまるまる写したのでは（今はコピペかな）、全くの時間の無駄になってしまう。教員になって後、ある大学でレポート提出を求めた際に、「余は先に〇〇につきて批評し、今又〇〇につきて論ぜり」とか「吾人はここに項を改めて論ぜむとす」とか、明治時代に出版された本の一部を、そのまま自分のレポートの文章として書き写しただけのものがあった。課題に合うようなタイトルだと思って借りたのが、たまたまかなり古い研究書で、わけもわからず数ページ分ひたすら書き写したのだと思うが、これはこれで辛かっただろうと、少しばかり同情した。

レポートが上手になるために必要なこと

国際政治経済学部国際政治経済学科 教授 飯田 幸裕

今回のテーマである「レポート」に限らず、「文章を書く」という作業は、「読む」「話す」という作業と比べると、とても難易度の高いものであると感じています。それは、例えば、私が担当している経済学の授業内容を説明するとき、自分が書いた文章を学生のみなさんに読んでもらうより、表情をつけながら言葉で説明する方が易しいと思うからです。そういうわけで、独自性の高い研究をまとめ上げた論文や、たくさんの人を楽しませることのできる小説など、高い水準の文章を書くことができる人はうらやましいと思います。今後、時間ができたら、上手な文章を書くことができるようにがんばります。

ところで、「レポート」というのは、調査・研究などの報告書のことを言います。中学生や高校生のみなさんにとっては、小論文などがレポートに対応します。何か調査をすれば、新しい発見があったかどうか、何か研究をすれば、今まで誰も見つけることのできなかつた結果を得られたかどうか、小論文であれば、与えられているテーマに沿って自分の意見とその理由を述べることができたか、が重要になります。これから、調査・研究・小論文に取り組む人は、優先順位の高いもの、ここでは新しい発見、独自性の高い分析結果、自分の意見などを「文章の中で輝かせる」ことが、レポートを書くときに重要だと考えてもらうとよいかと思います。

それでは、重要なことを「文章の中で輝かせる」にはどうすればよいのでしょうか。まず、それが重要であるということを理解するためには、調査する対象、調査方法を勉強して（誰よりも）詳しくなること、専門の研究領域を勉強して、その内容や研究方法に関して（誰よりも）詳しくなること、小論文であれば、テーマに関する知識、情報を（誰よりも）多く持つことが必要です。調査や研究については少し長めの時間が必要になりますが、小論文のテーマに関する知識や情報であれば、新聞を読む、そのテーマに関する書籍を見ってみることなどによって、「文

章の中で輝かせる」準備をすることができます。ここはどうしても勉強することが必要になるので、みなさんにとっては「興味を持つことのできる」調査・研究・テーマがよいですね。

ここまで書いてきて、「飯田は重要なことを文章の中で輝かせることができていたのか」ということになるわけですが、最初に書いたように、文章が上手な人をうらやましいと思う私にとって、質の高い文章を書くということについては、現在でも勉強の毎日です。ただ、「文章の中で何かを光らせる」ことはできていたかもしれません。30年ほど前になりますが、高校の修学旅行で京都・奈良へ行ったときに、報告書を書いたことがあります。もちろん京都・奈良にある神社やお寺について調べ、実際に行ってみてわかったことなどをまとめたわけですが、私は、神社やお寺それぞれについてまとめるだけではもったいないと思い、どのように行動していたか、例えば、「〇〇神社のお土産屋さんで美味しそうなおまんじゅうを見つけたので、それを買っていたらバスに乗り遅れそうになった」などといったことも加えてまとめました。友人たちからは「おもしろい」と言われた記憶がありますが、結果的に「レポート」にはなっていなかったかもしれません。

「文章を書く」ことは難しいですが、その土台にあるのは何かを「伝える」ということだと私は感じています。私が小学生のとき、帰宅するとその日に学校で何を勉強したか、何が楽しかったかを母親に話していました。修学旅行の報告書も、神社やお寺のことだけではなく何かを「伝えたい」という気持ちが入っていたのかもしれません。文章をまとめる技術が高まることで、「伝える」が「文章の中で輝かせる」レベルに上がってきます。みなさんも、シンプルな「伝える」という行動が、レポートが上手になるステップであると考えて、ぜひ友人やご家族、先生方とたくさん会話をしてみてください。

図書館からのお知らせ

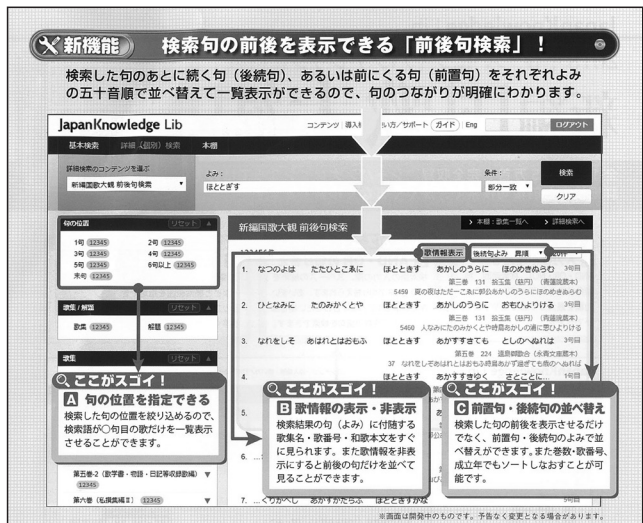
○ジャパンナレッジリブに『角川古語大辞典』と『新編国歌大観』が追加！

このたび、ジャパンナレッジリブに『角川古語大辞典』と『新編国歌大観』の2つが追加されました。

『角川古語大辞典』では、ジャパンナレッジリブ独自の詳細検索機能が搭載されています。また歴史的仮名遣いだけでなく、現代仮名遣いでも検索可能など辞書が引きやすくなっています。

『新編国歌大観』では、「語彙索引」のほかに、右図のように検索の前後が表示される「前後句索引」が追加されました。ほかにも入力欄が増やせたり、検索範囲も指定できたりといった機能もついています。

ますます便利なコンテンツが増えたジャパンナレッジリブをぜひご利用ください。



○CNKIの閲覧・ダウンロード可能範囲が拡大！

データベース「中国学術文献オンラインサービス(CNKI)」は、今まで1994年以降のものに限り閲覧・ダウンロードが可能でしたが、4月よりCNKI所収の全年代の論文を閲覧・ダウンロードできるようになりました。(なお、閲覧できる分野はホームページにあるように文学・歴史・哲学の分野です。)

CNKIがどのようなものかは「季報」No.89のP.6にも少し紹介しています。(「季報」No.89は図書館HPから閲覧可能ですので、ご覧ください。)より多くの論文が閲覧できるようになったCNKI。眺めるだけでもお得です。ぜひお試しください。



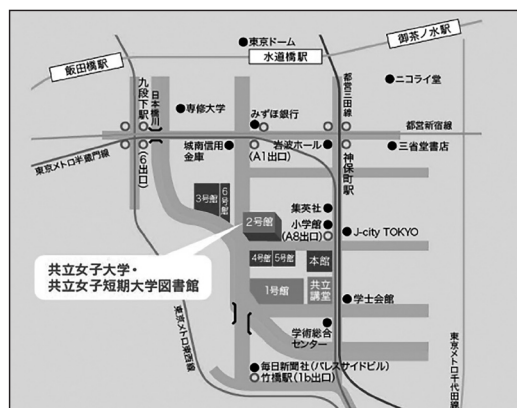
CNKIの新しいトップページ

○学習用ノートパソコンがますます便利に！

4月より地下1階のノートパソコンが入れ替わり、従来の「Word」「Excel」に加え、「一太郎」「PowerPoint」「Access」がインストールされました。レポートやレジュメの作成など、大いに活用してください。

共立女子大学図書館を利用できます！

昨年、共立女子大学図書館と本学図書館は協定を結び、両学生・大学院生は、共立女子大学図書館を相互に利用できるようになりました。共立女子大学図書館には、建築関係資料や児童教育等の資料が豊富に揃えられています。利用に際し、利用登録方法が女子学生と男子学生とで異なりますので注意してください。「共立女子大学・共立女子短期大学図書館 利用方法」を本学カウンターで配布しています。「利用方法」を熟知し、ぜひ利用してください。





ラーニング・commonsの ここがいいね！



利用者の声をきいてみました！

学生の皆さんは、ラーニング・commonsを利用して様々な学習活動をおこなっていますが、その中でも特に便利なところを教えてくださいました。

ホワイトボードや付せん等の備品が豊富で、グループワークに取り組むことができる点が良い。また、スタッフも親切で繰り返し利用したくなる。季節の装飾も好き。
文学部国文学科 4年

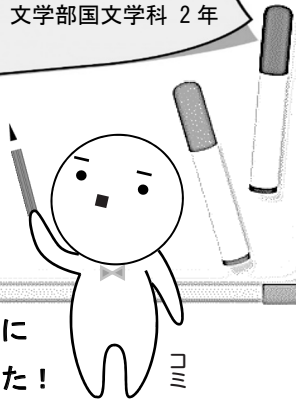
プレゼンテーションルームの壁がホワイトボードになっていてカッコいい。静かな場所で話し合いができるため、グループ発表の準備などの際に便利。図書館とつながっていて本を持ち込める点も良い。
文学部国文学科 4年

図書館に近く、本を利用した話し合いをすることができる。パソコンが多いため、WordやExcelでの作業を話し合いながら行うことができる。
文学部国文学科 2年

静かだけど、話し合いができる場所。
文学部国文学科 4年

ラウンジ等とは異なり、静かなところ。
文学部国文学科 2年

多くの学生から、ラーニング・commonsは学習やグループワーク等に、大いに役立っていると回答を得ることができました。ご協力ありがとうございました！



〇〇。グループワークができる！

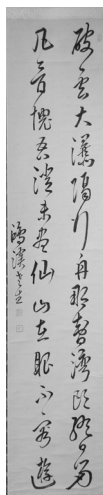
授業のグループ発表やゼミの準備など、様々なグループ学習をフレキシブルに行うことができます。ホワイトボードやPCが利用でき、ひと味違った使い勝手の良いスペースです！

新しい工夫をたくさん盛り込んだラーニング・commonsを是非、ご利用ください！

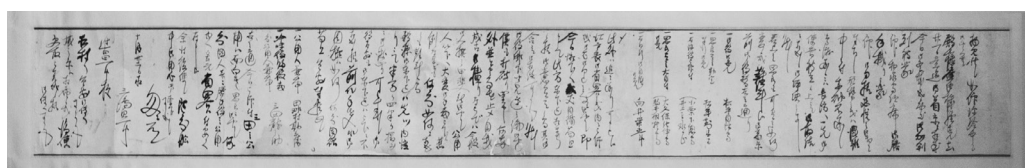
利用時間： 月～金 ……………	8：40～20：00
土・休業期 ……………	9：00～16：00

本学所蔵資料紹介

平成 30 年 1 月、進鴻溪^{しんこうけい}の玄孫で、本学 18 回卒業生の故進眞郎氏ご親族より、進鴻溪旧蔵資料（備中松山藩主板倉勝静書幅・額、佐藤一斎書簡、進鴻溪書幅（図版①）等）、及び本学ゆかりの資料（三島中洲書簡（図版②）・山田濟齋書幅等）の寄贈を受けましたので、ここにその一部をご紹介します。



◀図版① 進鴻溪書幅



▲図版② 三島中洲 進鴻溪宛書簡

進鴻溪〔文政 4(1821)年～明治 17(1884)年〕は、江戸末期から明治初期にかけての漢学者。諱は漸、字は于達、通称は昌一郎。阿賀郡唐松村（現在の岡山県新見市唐松）に出生。12 歳で新見藩丸川鹿山に入門、19 歳の時、備中松山藩儒山田方谷に師事。22 歳の時に江戸へ出て、昌平黌において方谷の師である佐藤一斎に 4 年間学び、帰郷後私塾を開く。藩主板倉勝静に召見して俸 3 口を賜い、藩士に列する。32 歳で備中松山藩校有終館学頭となり、36 歳の時に学頭に挙げられる。本学創立者の三島中洲と進鴻溪とは、藩儒山田方谷の兄弟弟子として、親交が深かった。有終館学頭の進鴻溪が方谷の命を受け、備中松山藩への出仕を促す書簡を携え、伊勢の津（藤堂藩）に遊学し齊藤拙堂に師事し帰郷した中洲のもとを訪れている。その 1 ヶ月後、中洲は出仕を決意し、藩士となり、後に進鴻溪に次いで有終館の学頭となる。その後、進鴻溪は備中松山藩の要職を歴任し、中洲と共に幕末の混乱期を奔走した。明治維新後は二君に仕えることを拒み、後進を育てる道を選んで教育に専念した。居を閑閑舎と名付け、後に備中松山藩主板倉勝静の揮毫による扁額「閑閑舎」を掲げた（図版③）。岡山県より聘かれ天城中學を教授し、堺県師範学校教官となり、私塾潜龍舎を開いた。さらに播州赤穂の随鷗舎教官（図版④）、美作落合郷嚶鳴舎教官として多くの人物を輩出した。62 歳の時、栃木県師範学校（現・宇都宮大学）に招聘されたが、なかなか決することができない進鴻溪に、中洲は書簡を送り促した。ついに同師範学校校長兼第一等教諭、並びに栃木県第一中学校（現・宇都宮高等学校）校長に着任した。しかしながら翌年 63 歳の時、病いのため辞して帰郷。一時回復し私塾を開いたが、明治 17 年閑閑舎にて 64 年の生涯を閉じた。



▲図版③ 板倉勝静「閑々舎」



▲図版④ 進鴻溪（3 列目の右から 5 番目）

「鴻溪進先生行状」に「温雅にして洒落、風致は人に過ぐ。また善く笑ふ。是を以て婦人小兒と雖も、甚だしくは畏懼せず。」と記載あり。人となりが偲ばれる。

本学教職員関連著書紹介

二松學舎大学学術叢書

『戦後日本の国語教育』

—二松學舎に学んだ沖山光の軌跡—』

沖山光研究会 編

(東京学芸大学出版会、2018年3月31日発行)

菊判・493頁・4,500円＋税

ISBN：9784901665544



本書は沖山光の伝記研究の嚆矢である。沖山は八丈島に生まれ、大正14(1925)年に青山師範学校(東京学芸大学の前身)本科第一部を卒業し小学校訓導として児童教育に当たる。が、なお向学心止まず、昭和3(1928)年に東京府青山師範学校訓導になると、時を同じくして二松學舎専門学校本科第二部に入学し、第一回昭和5年度卒業生に名を連ねた。今でいう小学校教員を勤めるかたわら、午後5時10分から同9時40分の間には九段の夜学に通っていたのである。

そんな沖山のその後は、『国語教育研究大辞典』(1988年)に、次のように解説されている。

昭和二十一年文部省入省。石森延男監修官を助け、戦後の国定国語科教科書『おはなをかざるみんないいこ読本』の編集に尽力。以来、教科調査官として、国語科学習指導要領同指導書の作成をはじめ、各種学力調査の実施、実験学校の研究指導、『初等教育資料』の編集等、文部省指導教育行政に献身的に努め、戦後国語教育の基盤を確立した。特筆すべきは、昭和二十六年漢字習得状況調査に当たり、問題作成、採点と一人で背負い学年配当の科学的根拠の道を開いたこと、ひら仮名からの学習開始の定着を図ったこと、「筆順の手引き」を作成し、乱れ気味だった筆順の標準化を図ったこと、国語科をはじめ各教科の時間配当の適正化に努めたことである。

その後、沖山は国語教育の改善、特に読解のあり方について考究し、「構造的読解」理論を構築して実践研究を展開した。

本書は、その構造学習研究に従事する元小学校校長の太田由紀夫・樋田明両氏と、本学教職支援センター小淵朝男教授・同センター元特別招聘教授榎本善紀(現、東京都教職研修センター教授)、そして両者を結びつけた調整役磯による分担執筆から成り、それに本学大学院後期課程2年鈴木和大による沖山光著作目録と、2015年度磯ゼミ生有志の翻刻による未完の草稿『低学年における総合的取扱の研究』が付載されたものである。本学の大先輩沖山光の国語教育の軌跡を、本書によって学んでもらえればありがたい。

(副学長・文学部国文学科教授 磯水絵)

新着図書 おすすめの1冊

鎌田浩毅 著 『理科系の読書術—インプットからアウトプットまでの28のヒント』

中央公論新社(中公新書:2480) 2018年3月 [請求記号] 081-C-2480

“読書”について皆さんはどんなイメージを抱いているでしょうか？

この本は火山学・地球科学等を専攻している著者が読書という文系的な行為を理系の視点で捉え、自身も使用している効果的な手法を紹介しています。

大きく3部で構成され、読書に苦手意識のある人の為の読書術や仕事・勉強を効率よく進めたい場合の読書術、さらには上級編の読まずに済ませる読書術まで論じられています。得たい知識を本から必要な部分だけ得れば良い、また自分に合うように読書をカスタマイズしていくという理系的なシステムとして考える読書術は、これまでの読書の固定観念へ一石を投じています。各章の冒頭には箇条書きでポイントが抜粋されており、要点を掴みやすいのも特徴です。

読み終わった後、論じられていた数々の読書術を実践してみたいくなるでしょう。読書に苦手意識のある方、読書家の方にもぜひ一読いただきたいおすすめの1冊です。

本学教職員著書紹介

紹介・屹立する言葉

『論語の学校』時習編(対訳付き)

江藤茂博 編
(研文社、2018年3月30日発行)
四六判・176頁・1,100円＋税
ISBN：9784991009402



人の前で話すという仕事を、長く続けてきた。講義などとは少しおこがましいが、話していて何かが生まれるようなこともあれば、何も生まれないこともある。それは、もちろん語る者の力量の問題である。それを承知でやや身勝手な言い方だけでも、何かが生まれるには聞き手も大きく影響するし、何を語るのかという材料の問題もまた同じように大きい。そして、語るべき対象となる材料に謙虚なまなざしを向けるとき、時としてそれが語るに足るみごとな素材となることがある。最初の「論語」本『生きる力がわく「論語の授業」』（朝日新聞出版 2013）も、成立学園中学高等学校という、二松學舎で学んだ福田英爾氏によって大正時代末に創設された学校での、そうした光景のなかでの講座を編集したものであった。この春に編集した「論語」本『「論語の学校」時習編』（研文社 2018）もまた、二松學舎大学附属柏中学・高等学校での公開講座がベースとなった。「論語」の面白さを子供たちに知ってもらいたいということを第一に、またこれからグローバルな社会に生きていく子供たちの刺激になることも考えて、「論語」の英語訳や日・英・中・仏語での「論語」に関するエッセイを掲載している。本学のスタッフだけでなく、海外の研究者にも協力していただいた。「論語」本などいまさら、という向きもあるかもしれない。が、いまだから、というものを、本学のスタッフによる優れた講義に、その時に楽しんでくれた聞き手に、またいわずと知れた「論語」という古典素材に魅されて、ここに中高校生向けに編集した次第である。

(文学部長・都市文化デザイン学科教授 江藤茂博)

表紙の松について

今回の表紙の写真は、九段2号館前に立つ2本の松です。
二松學舎のシンボルの松の向こうにラーニング・コモンズがあります。まさに新しい教育環境と141年の伝統とのコラボレーションです。

訂正 前号 No.101 の11頁に掲載しました『東アジアにおける都市文化—都市・メディア・東アジア』にご執筆いただきました文学部中国文学科教授の田中正樹先生の氏名を記載しておりませんでした。ここに訂正し、お詫び申し上げます。

編集後記

「季報」102号をお届けします。
今号では、「レポート」をテーマとした文章を森野先生・飯田先生に、著書紹介を磯先生・江藤先生にご執筆いただきました。各先生に御礼申し上げます。(S・A)

二松學舎大学附属図書館

季報

第102号

発行日 平成30(2018)年7月10日

発行 二松學舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

電話：03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社サンセイ

電話：03-5227-8333